



乾 賢一
京都薬科大学
学長

いぬい・けんいち氏

1947年生まれ
1969年 京都大学薬学部卒業
1977年 京都大学薬学博士取得
1978年 ハーバード大学医学部・マサチューセッツ総合病院研究員
1987年 京都大学医学部附属病院助教授・副薬剤部長
1990年 東京医科歯科大学医学部附属病院教授・薬剤部長
1994年 京都大学医学部附属病院教授・薬剤部長
2010年 京都薬科大学学長 京都大学名誉教授
日本薬学会賞、日本薬剤学会賞、病院薬学賞など受賞歴多数
日本私立大学協会理事、日本私立薬科大学協会理事

新時代の「ファーマシスト・サイエンティスト」を育成

今日すべての大学が、社会における存在意義を問われています。それにより多くの大学が、今まさに自ら変わる努力をしているところではないでしょうか。薬科大学は、その点で先陣を切ったと言えるでしょう。

2006年度より6年制薬学教育がスタートしました。私は2002年から「薬学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」の委員としてこの改革に関わり、6年制薬学教育の必要性を一貫して訴えてきました。

2010年に京都薬科大学長に就任しましたが、この大学における私のミッションも、引き続きこの薬学教育改革を強力に推進することにあります。そして本学が、また日本の薬学教育全体が、確かな成功を収めることをどこまでも追い求めていくつもりです。

医療ニーズに応える「薬学教育改革」

今般の薬学教育改革とは、社会のニーズや期待に則った改革にほかなりません。医療の高度化、多様化に伴い、安全で安心な医療がいつそう必要とされるなか、「質の高い薬剤師」の養成に大きな期待が寄せられています。薬学という学問自体も、化学に立脚した「モノ」を対象とする学問はもとより、「ヒト」を対象とする学問としての発展も求められるようになりました。

これから薬剤師を目指す学生は、基礎的な知識・技術は当然のこと、豊かな人間性、高い倫理観、医療人としての教養、課題発見能力、問題解決能力、現場で通用する実践力を身につけることが不可欠となったのです。

こうした背景から、臨床現場での長期実務実習を含む6年間の薬学教育がスタートしました。2011年度が完成年度となり、卒業生の就職は全国的に非常に好調でした。そして昨年4月より、新たな薬剤師が全国の病院、薬局、製薬企業などで働き始めています。

薬学教育改革を通じて、現職薬剤師の意識も変わりつつあります。チーム医療が進むなかで、薬の専門家としてレベルアップが進み、医師や看護師からの評価も高まっていると聞きます。

薬剤師を取り巻く制度も大きく変わりました。2012年度診療報酬改定において「病棟薬剤業務実施加算」が導入され、病棟ごとに専任の薬剤師を配置することで報酬が加算されることになりました。この改定は、これまでの病院薬剤師の病棟業務実績がようやく評価されたということであり、非常に感慨深いものがあります。今後は病棟に薬剤師を配置することが今以上のステータスとなり、収入源にもなっていくのです。

医師不足や医療現場の疲弊といった問題が数多く取りざたされていますが、厚生労働省も指摘しているように、薬剤師をもっと積極的に活用すれば、日本の医療現場は間違いなく改善していくはずで、今後は病院に限らず、保険薬局や各種企業においても薬剤師の活躍の場は大いに広がっていくでしょう。

薬剤師を目指しつつ研究も盛んに

6年制薬学部は薬剤師養成のためにあり、4年制薬学部は修士課程と合わせて薬学研究者養成のためにある。一般にはこのように理解している人が多いかもしれませんが、私の考えは違います。6年制のなかで薬剤師養成を行いながら、十分に研究もしていく。それができないならば、この薬学教育改革が真に成功を収めたとは言えないと思っています。6年制に変わったために研究がおろそかになり、日本の研究レベルが落ちるようなことは絶対に避けなければなりません。この国の輝かしい薬学の伝統を今後も引き継ぎ、いつそう発展させていくことが私たちに課されているのです。

そこで私が以前から申し上げているのが、「ファーマシスト・サイエンティスト」という言葉。研究能力のある薬剤師という、これからの薬剤師像を表現したものです。臨床医学の目覚ましい発展の根本に「サイエンス」としての発展があるように、臨床薬学を今以上に発展させるには、臨床上の問題発見を科学的に究明する姿勢が何より求められます。そんな新時代の薬剤師を養成していくことに京都薬科大学は全学を挙げて取り

組んでおり、そのために特色ある教育を実践しています。

「4年制博士課程」の充実が急務

例えば、3年次後期から研究室に所属することができます。研究の基礎手法から取り組み姿勢までを早い段階から身につけるのです。初期導入教育にも力を入れています。少人数制の基礎演習でSGD（少人数対話型授業）やPBL（問題発見型学習）を経験するなかで問題発見・解決能力を育成し、豊かな人間性やコミュニケーション能力も養います。1年次に早期体験学習として病院、薬局、企業などの見学を行います。

語学教育も充実させていきます。2013年度から1年次、3年次、5年次にTOEIC（R）テストの全員受験を実施します。また、6年次の卒論発表会を英語で行うことも決定しました。薬学教育においてもグローバル化にしっかり対応していくことが必要との考えからです。

学部教育とならび、私がとりわけ重視したいのは大学院教育です。薬学教育改革において、6年制薬学部の上に立つ4年制博士課程は将来の指導者育成という点で大なる責任を負っています。どの薬学部にとっても今後の課題でしょう。本学は2012年4月から新たに薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制、定員10人）を設置。加えて、文部科学省「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」への医学系大学との共同申請が採択され、4年制博士課程の中に「がんプロコース」を設けました。国立大学の研究科にも勝る勢いの大学院として船出することができたことと自負しております。

薬学教育改革はここがゴールではなく、これからがスタートだといってよいでしょう。社会が求めるより良い医療の実現のために、本学はこれからも質の高い薬剤師を数多く養成していく所存です。